

たかい小右衛門と云ひ、馬捕に馬の肩をひねらせし事あり。島原浪人の教にて、指物カクシと云ふ説あり。といへり。平次按するに、山崎小右衛門は此の時加州藩よりの使節にて、武部久左衛門・堀江加左衛門は、足輕目附として小右衛門へ添へられしを、武部を山崎の同僚にて兩使の如く書載せたるは、全く堀樗庵の誤説なり。また此の時各首級を獲たりといふ事も、諸記録に所見なし。

○御歩橋

金澤橋梁記に、御かち橋油車へ行く道とありて、宮内橋より油車へ出る往來の橋にて、倉月用水川に架けたり。町會所留記に載せたる貞享五年五月、元祿三年四月等、惣構藪之内捨子居書に、御徒衆町橋番人平右衛門・同十兵衛とありて、惣構橋にあらずといへども、橋爪に後々迄橋番人の居宅ありて、惣構組に班し、惣構肝煎の裁許に屬せり。

○北條赤藥

堀の赤藥とも呼べり。此の赤藥は、舊藩土堀氏の傳法にて、堀氏の邸宅は御歩橋の橋爪なりしゆゑに、従前は此の地邊を俗に赤藥と地名の如く呼びたりしかど、廢藩後堀氏此の

邸地を賣却して退去せり。抑、此の赤藥は、元前田家の傳法なりしが、利常卿の時藩士伊藤内膳へ其の法を賜はりけり。然るに伊藤氏の甥堀才之助は、甚だ勝手不如意なるにより、家祿召上げられ、石川郡鶴來村へ在郷を命ぜられたり。其の頃伊藤内膳より公廳に達し、藥方を堀才助へ譲り與へ、此の藥を嚮きて活計の助となさしむ。依りて才之助彼の地に在住して、此の良藥を製しけり。才之助の子五兵衛、其の子六郎兵衛に至るまで鶴來に居住しける處、寶永年中六郎兵衛與力の士に抱えられ、金澤へ出でたり。才之助以來數拾年鶴來に居たりし頃、白山麓等の里人此の赤藥を買ひ往き、諸病人は勿論、牛馬までも服用せしめたり。故に彼の地方には其の名殊に高く、金澤へ出づる毎に、必ず數百貝を乞ひ求め行きしと也。按するに、才之助は武勇の士にて、大坂夏陣の時既に七十三歳也。然れ共軍の相談の爲めとて、山崎閑齋に添へさせらる。折節痼病を煩ひ、乗物にて出軍し、戰場にては馬の上下は、家士共に助け抱え乘せられしかど、無慮足輕大將也と、古兵談殘叢集にいへり。慶長十七八年の士帳に、千二百石堀才之助と見え、

元和元二年の士帳にも同様記載し、寛永四年の士帳に、百石能州に罷在る堀才之助せがれ。とあり。右士帳にて考ふれば、初め能州へ在郷を命ぜられ、後加州鶴來へ移し在住を命ぜられしと聞ゆる也。

○家方之名藥

舊藩中は士族の家々に、家方之名藥とて、傳法の藥を製し、所望人へ調合し出すもの多し。其の中にも高名なるものは、多賀の蜜丸・庄田の萬金丹、或は栗田の白蛇散・上坂の瘰癧の藥・小林の金瘡藥・福田の神教丸・熊谷の桑山の保童圓・笠間のつき目の藥・林の咽喉風の藥・高田の面疔の藥・村田の五香湯・早川のやけど藥など、此の外にも種々多かりけり。按するに、右家方之名藥の中にも、國初以來の製藥もあるなるべし。異本微妙公夜話録に、天徳院殿の御局の屋敷の近邊に、栗田久左衛門の屋敷あり。家傳の白蛇散を調合のため、山里の者へ申付け、まむしを多く取寄せける云々。とあり。右は元和年中の事也。然るに廢藩置縣の後は、士族共各居宅を所々へ移し、今は其の居所も容易に知れ難く、又中には其の藥方は今に傳ふといへども、製藥の御規

則に拘はり調合を止め、或は賣藥税金の爲め製藥を廢し、購求人に施す事を止めたるもありといへり。實に遺憾に堪へざる事といふべし。今堀赤藥の因みに此の事を記載す。

○油車

牛右衛門橋なる倉月用水川にせきをかけ、水車あり。昔は此の水車にて、茶種油を製す。故に此の地邊を油車と呼べり。町會所留記に載せたる寶永三年正月の願書に、油車町鶴屋武兵衛・同町橋屋庄右衛門とありて、寶永の頃は此の地邊を油車と呼びたり。但し元祿六年の士帳には、堅町後水車とありて、此の頃の書札には水車と記載す。淺野川にも今水車と呼べるあり。油車は、實は水車より起れる地名也。

○油車來歴

此の水車の起原は、今堅町に住せる多田源兵衛といへる油商人の先祖與助と云ふ者、正保年中に始めて倉月用水川に水車を設け、燈油を製す。其の地はそのかみ藩士岩谷牛右衛門と云ふ人の舊邸也。正保の頃は水溜堀と成り居たるを、與助此の地を賜はるならば、倉月用水の川筋を付替へ、